

赤ちゃんのおみそや

— 数育の中における障害児差別について —

福 井 達 雨

☆ 義人の日記

夜おそく講演を終わって帰宅した。ひと風呂浴び、夕食をとっていると、家内が「ちょっと、これを読んでみ」といって、一冊のノートをさし出した。

それは、小学校四年生になった、長男義人の日記であった。(自分の子どもといえども、悪いなあ) そんな良心の動く中で、エデンの園で、アダムがエバの誘惑に勝てなかった心境を感じながらその日記を読んだ。

十月二十九日 火曜日 晴れ

ぼくは、みんなから算数が五てんしかとれなかった、赤ちゃんのおみそやといわれた。

ぼくは、算数ができないから、やっぱし赤ちゃんのおみそやなと思う。

ぼくは、なぜ算数ができないんだろう。みんなは、止揚学園

で生まれたから、ばかやという。ぼくは、そんなことはないと思う。止揚学園に生まれてよかったと思っている。

みんなは、ぼくとちがって止揚学園で生まれていない。ぼくは、みんなとちがう生活をしている。ぜんぜん、みんなの家とちがうのや。

止揚学園の子どもは、みんな、すばらしい、やさしい、ゆたかな、美しい心をもった子どもや。

止揚学園のかつみちゃんとか、じゅんちゃんは、ぼくの友だちや。みんな、美しい心をもった、いい子どもや。

K小学校の中で、ぼくが一番ほかかもしれないが、止揚学園の子どもとおなじやさしい美しい心をもっているから、かまわないじゃないか。

お母さんは、ぼくがばかでもよいからいい子どもになってほしいといった。

私は、この日記を前に、がくせんとし、考えざるを得なかつ

た。義人は、一年生のころ、「お前は、止揚学園の子どもやから、アホできたない」「小学校に來ないで、止揚学園で勉強せ」。友だちのこのような言葉に負け、学校ぎりい病にかかってしまった、心理的に弱い子どもであった。

あれから四年、見違えるように、強く、たくましく成長した。

友だちから、父親の職業のために、いろいろな事をいわれても「そうやない、僕は止揚学園に生まれてよかったと思う、みんなは、馬鹿にするけれど、止揚学園の子どもは、心をもっているんや、そういう素晴らしい子どもを、友だちにもっているんや」と、強く自己主張をするようになった。

これは、父親として、驚きと共に、喜びである。子どもというのは、いつの間にか、素晴らしい成長をし、それに気付かされた時、教えられる何かを感じるものである。

しかし反面、私が重い知恵おくれの子どもの教育をしている中で、この父親の職業が、自分の子どもに大きなハンディキャップを持たせ、それをかつぎ、戦いながら、歩いていかなければならない、子どもの歴史を思う時、私は、たまらないものを感じてしまふ。

こんな時、日本人のツメタさ、エゴイズムを感じるのである。障害をもった人たちに、連帯感があれば、こんな不幸な出来事

は、おきないであらう。

☆ 私たちの宝として

さて、義人が入学した時、差別が強く、転校を余儀なくされた能登川南小学校の子どもたちは、四年間で、障害児に対する考え方が、見違えるように変わってきた。

約九年前、日本で初めて、重い知恵おくれの子どもたちが集団で公立の小学校に通学し、四年前から、障害もつた子どもと、もたない子どもが、同じ教室で勉強するようになった。

この小学校の、吉信圭子という六年生の子どもが、「私たちの宝として」というテーマで、次のような作文を書いている。

「私たちが二年生になったころ、仲よし学級ができ、それ以來、太田敬子ちゃん（止揚学園児）をはじめ、仲よし学級のみんなと友だちになりました。

敬子ちゃんは、同じ六年なので、音楽や社会の時間に、私たちの教室でいっしょに勉強するようになり、六年星組の教室は、敬子ちゃんのおかげで、にぎやかになり、みんな楽しくくらせるようになりました。（中略）小学校の先生から「この学校は、止揚学園の人がみんな入りきれぬ教室がなく、先生数も不足していることから、止揚学園の全部の人に来てもらえないのが残念だ」という話を聞いて、ほんとうに教育がおくれない

る事が、残念だと思えます。

でも、もし止揚学園の人、みんな一人残らず私たちの学校へ来てもらえたら、どんなにすばらしいでしょう。

福井先生の書かれた、「ほくアホやない人間だ」や、「アホかて生きているんや」を読むと、止揚学園の人たちは、近所の人などから差別の目で見られ、暗い気持ちで生活されたということが、にじみでているように思いました。

止揚学園の人たちにも、ぜひ明るい生活をしてもらいたいものです。

そのためにも、学校でみんなと学ぶことが、いちばんよいのではないのでしょうか。私たちのなかにも、差別の目で見られる人いると思います。

その人たちに、ほんとうに理解してもらうためにも、よいことだと思えます。

(中略) 五年生の時、社会の時間に私たちは、資料を写す勉強をしていました。

敬子ちゃんが、うらやましそうに見ていたので、先生が「敬子も地図を写してみるか」といわれ、うれしそうに地図を写していました。

私は横目で、敬子ちゃんが写すのをじっと見ていると、大ぶん

はずれていましたが、せつせと写しているのが目にうつり、心の中で「がんばりや」と何度もくりかえしおうえんしました。いえ、その時は、私だけが見ていたのではありませんでした。

組中の視線が、敬子ちゃんに集まっている事に気がつき、「みんなも、私と同じ気持ちなんだなあ」と思ったことを、今も、はっきりとおぼえています。

どんな事でものりこえて、明るくふるまっている敬子ちゃん、その時ほど美しく見えた事はありません。

今は、六年星組のみんなと、敬子ちゃんは、しっかりと結ばれています。

このきずなを、だんだんと広げながらいつまでも、いつまでも、持ち続けたいと思います。

能登川南小学校の子どもたちは変わった、心が、考えが変わった。

長男義人の通学している小学校と、能登川南小学校の子どもたちの、障害児観の差は、そこに、障害をもった子どもが、いるかいないのかの差であろうと思う。

このことを思う時、私は、「共に」の教育の大切さを痛感するのである。

昨年、能登川南小学校の運動会は、素晴らしかった。

障害をもった子どもとまたない子どもが、同じ条件で、行進も、競技も、マスゲームもおこなった。

たとえば、五〇メートルで、障害をもった子どもは、必ず二〇メートル、三〇メートルおくれる。その子どもを、障害をもたない子どもが一生懸命に手をつないで走る。この障害をもたない子どもは、いつも、後から一番である。それでもいやな顔一つせず、誇りをもって手をつなぎ走っていた。

そして、ゴールにつくと、さきにゴールにいていた障害をもたない子どもたちが、この二人を輪にかこんで、クラスにつれて帰るのである。

行進の時も、マスゲームの時も、一年生の子どもが手をつなぎ、歩き、おどっていた。

この運動会で、特に感激したことは、もう小学校の先生や、止揚学園の職員が、何も手伝わなくてもよくなり、すべて、子どもたちが、共に力を合わせ、その運動会を進めていったことであつた。

私は、大人が手伝わなくても障害をもった子どもたちと、またない子どもたちが、自分たちの手で助け合いながら、物事を行っていく子どもの場を、理想とし続けてきた。

この花が、少しずつ少しずつ、この田舎の小学校に開花しつつあるのだ。

長い時間を要した。忍耐、忍耐、忍耐の時間であった。

もし、乳児期、幼児期から、両者が、共にの場で、共にの教育をうけてきていたら、こんなに長い苦しみを、私たちはしなくてもよかつたのではないだろうか。

乳児期、幼児期の性格形成期に、築かれた障害児差別感を、打ちくだき、共にある場をつくらうとすることは、非常に困難なことである。

しかし、教育の世界は、「どんなに困難であっても、可能性がないと思われても、期待がなくとも、その中で、可能性を信じ、期待を持ち、努力する世界」である。困難だから、期待がないからやめましょうということとはできない。困難だから、より強く、はげしく、共にある場をつくる努力をしていこうと思う。

教育の場で、人間の生命をおかすような教育にぶつかった時、生命の大切さを教え、人間の心を豊かに育て、心の世界を見つめる。そこに教育があることを叫びたい。

教育とは、頭をつくることではなく、人間をつくることだと、シミジミと思う。

(止揚学園)